

## 書評

ロナルド・シーガル著、富田虎男監訳

『ブラック・ディアスポラ』

—世界の黒人がつくる歴史・社会・文化—

川島 正樹

書名の意味そして著者の素性から語り始めねばならない。まず「ディアスポラ」の展開の発端は、大西洋奴隷貿易であった。「アフリカン」ではなく「ブラック」とした理由は、「ニグロ」から「ブラック」への変移の歴史と各地における呼称の複雑さにある。アメリカ合衆国に居住するバルバドス人はアフロ・カリビアンかアフリカン・アメリカンか。「民族はどんな状況にあっても自分の好きなように自分を呼ぶ権利がある」のはもちろんだが、それは時として混乱を生じる。また「カレード」とか「ムラト」と呼ばれている混血の人々はどうなるのか。本書ではこれらの人々も「ブラック・ディアスポラ」、すなわち大西洋奴隷貿易の結果各地に居住することになった「奴隷制度とその後のさまざまな形の従属と人種差別を支えようとした人種主義」の基礎となっ

た、「黒人の血統の特性を示す唇とか鼻とか髪の毛のようなほかの身体的特徴のすべて」を含む「黒さ」で分類される人々に含まれる（一七〇—一九頁）。

著者の「人種」や経歴について、昨今非常に神経質にならざるをえない場合が少なくないが、「序文」の冒頭で著者自らがそれを明らかにしている。シーガル自身がディアスポラである、ただし白人の。彼は「ドイツでヒトラーが権力の座についた前の年」に「ユダヤ人のディアスポラとして、南アフリカ共和国に生まれた」。アフリカーナー民族主義の「純正」国民党がナチズムに熱狂に近い親近感を宣言していた時代だった。こうしてシーガルは「人種主義が大嫌いになった」（二三—四頁）。同時に著者は「南アフリカのユダヤ人社会の見解に挑戦することになった」。なぜなら、ユダヤ人が国民党の政権獲得に抱いた不安は「白人身分」の再保証によって「和らげられた」からである。著者はその後アフリカ民族会議（ANC）指導者の国外脱出を助ける活動に従事する（一四〇—一五頁）。そして本書は「自由の大義に殉じた偉大な指導者」であり、著者の「最愛の友」にして一九六〇年にともに亡命した同志でもある故ANC元議長にささげられている（三頁「献辞」）。

著者は研究者ではなくジャーナリストであり、また信念にもとづいて行動をいとわない活動家でもある。本書の特

徹として各地での豊富なインタビューにもとづく現在への眼差しと一貫した反人種主義（どの人種によるものであれ）の立場が挙げられる。ホロコーストや奴隷制は過去のことであるが、『デトロイトの荒廃や、リオデジャネイロで「街路清掃」の一環として行われる黒人の子供の殺害は現在のことである。また、「犠牲者が往々にして、犠牲者相互の加害者であり、犠牲者自身の加害者でもある」という究極的な不正を私は現在のはっきりと認識するようになった』と著者は言う（二〇頁）。さらに、つぎのようなエピソードも披露されている。著者が原稿を書き上げてニューヨークのある出版社を訪れた時の経験だった。出版社側から構想を誉められた後に「ただ一つだけ問題がある。それはあなたが白人であるという点だ」と言われた。もちろん著者は「手厳しく」反論した。「人種」をめぐる憂慮すべき思想状況が示唆される（一九～二〇頁）。

本文は五部構成で八百頁近い大著であり、そのカバーする国や地域は南北アメリカやカリブ海、アフリカ、ヨーロッパに及ぶ。第一部はディアスポラの始まりの歴史である。書き出しのインパクトは強烈だ。「人類が洞窟に住んでいた時代には、奴隷はいなかった。人間を財産として認識するには文明化が必要であった。人類進歩の最大の逆説は、それが多くの光とともに深い闇をもたらしたことである。」（二

五頁）。“slave”という言葉の語源は、のちに農奴（“serf”）を表すことになるラテン語の“servus”ではなく、“Slav”にあった。すなわち仲間のキリスト教徒を奴隷化することを嫌って異教徒スラヴ諸民族のなかから奴隷が獲得された。この奴隷たちはとりわけ砂糖生産のために求められた。十字軍によるイスラム勢力からの砂糖キビ畑の奪取以降、イベリア半島でのイスラム勢力との戦争を経てキリスト教徒王国は労働力たる奴隷としてムスリムの奴隷主が輸入した黒人奴隷を獲得する。黒人奴隷による砂糖キビ生産地はマデイラ諸島から、アフリカ中部大西洋岸海域に浮かぶサントメ島に広がり、間もなくコロンブスによる「新世界」到達を契機に大西洋の対岸に拡大し、奴隷貿易を底辺に据えた大西洋貿易システムが確立される。多くの統計的研究があるが、生きて大西洋を横断した奴隷の数は一〇二〇万人と推定される（二五～二七頁）。

私見によれば、これこそが所謂「近代世界システム」の成立を意味する。近代史は「先進的」地域でまず自由が拡大しながら次第に「周縁的」地域でも古き不自由が徐々に解消されてゆく歴史ではなく、もっぱら自由と富が植民地宗主国内において拡大する一方で不自由と貧困が植民地に浸透してゆく歴史として、さらに後者が前者を支える歴史として理解されるべきである、と評者は確信する。奴隷貿

易の結果、西欧諸国は裕福になり、とりわけ覇権国家イギリスは「産業革命」と呼ばれる工業化の先陣を切る。奴隷制が盛んになるのは、オランダ人が伝授した砂糖生産で栄える西インド諸島で、アダム・スミスの『諸国民の富』によれば、もたらされる利益は投資額の二〇％だった（八八頁）。イギリスで民主化が進む画期となる一六八八年の「名誉革命」は「王立アフリカ会社」が独占していた奴隷貿易が「すべての自由な市民の権利」になる時代の到来を意味した（五七頁）。発展する奴隷貿易は綿工業を刺激し、工業化が進展し自由貿易の利点への認識が高まると、奴隷貿易と奴隷制が終焉を迎える条件も整う。一八〇七年に奴隷貿易を止め、一八三三年に奴隷制を廃止したイギリスは、今度とは絶大な海軍力を背景として他国に奴隷貿易禁止の圧力をかけることで優位を保持する（五七、六〇頁）。

奴隷制によってイギリスだけでなく、現在の覇権国家アメリカ合衆国の発展ももたらされる。同国の南部の奴隷制が生み出す綿花は全輸出の六〇％を占めた。イギリスと同時期の一九世紀初頭に奴隷貿易は禁止されるが、それは奴隷価格の高騰につながり国内の奴隷売買を刺激した。よく指摘される同国における奴隷の死亡率の低さだが、それは「おそらく憐れみの情からではなく、経済的事情からであった。」西半球のどこでも他に人種間の通婚を法的に禁じた国

はなかった。徹底した人種主義と生命の損失を最小限に留める管理がこの国の奴隷制を支える（第七章）。

「第Ⅱ部 反乱の精神」では、フランス革命の影響下で独立を果たすことになるハイティに最大のスペースと敬意が払われている。奴隷反乱は英領カリブ諸島やガイアナ、アメリカ合衆国、さらにはブラジルへと波及する。

「第Ⅲ部 解放の連鎖」以降の叙述ではジャーナリストとしての経験と気概が十分に力を発揮され、「革命」や「反乱」といった過去の事件への注目を越えた現在への眼差しの深さが印象的だ。本書の真骨頂は、しかしながら、被差別者自身の問題点にも鋭い眼が向けられている点にある。たとえば日本語文献が手薄なガイアナだが、あるインド系政治家の生きざまに敬意が払われ、また期待が寄せられてもいる点で注目される（第一八章）。人種にかかわりなくある特定の集団の自由ではなく、すべての人の自由を座標軸とする点で、著者の基準は一貫する。

日本も加わった国際競争の激化の中で製造業部門が縮小を強いられ、最大の影響を受けたのがアメリカ合衆国の都市中心部の貧しい黒人たちだった。市民権（公民権）運動が目指したものが単なる市民的権利にとどまらなかったことはキング牧師がメンフィスの清掃労働者のストライキを支援中に暗殺されたことが示している（第二一章）。また砂

糖植民地隆盛の後のイギリスにおける黒人と人種関係について私たちはこれまでどれほど知っていたか、はなはだ疑問である。第二章はそれ自体が貴重であらう。

『第四部 歴史のいまを旅する』では、かつての運動高揚期以降の各地における現在と未来への展望が語られる。これまであまり触れられなかったトリニダード、マルティニックおよびグアドループ、カナダに関する各章を含むだけでなく、同時に同じディアスポラなのに違った展開になる理由が模索される点でも興味深い。とくに評者は「トリニダードの仮面」(第二章)に同感を覚えた。マルティニックでは黒人の文化的表現を奨励するために大金を費やし、行政の支援も行っているが、その実りはあまりにも小さい。フランス人というアイデンティティを受容することで保証された派手な消費文化に心を奪われたせいだとされる。他方トリニダードは創造性に富んでいた。同国が石油資源で財政的に潤ってきたのは事実としても、ジャマイカと比べた好戦的黒人意識の欠如というよく言われる批判にもかかわらず、著者はトリニダードの黒人文化にはぐくまれてきたコスモポリタンな創造性の可能性に着目する。しかもトリニダードの人々は「黒人文化自体を否定することも、あるいは黒人のアイデンティティを放棄することもなしに」それを示した。「ほかのブラック・ディアスポラも、さらに

それ以外の人びとも、教訓としてこのことを心にとどめておいたほうがよい。仮面を脱ぎ去って人類の素顔はどうあるべきかを見出すためには。」(五四八頁)。

アメリカ合衆国の現在ではデトロイトに焦点が当てられる。今日デトロイトの都市圏全体で人口は四百万人で白人が七七%を占めるが、都市中心部の人口は以前の半分ほどの百万人で、その八〇%近くが黒人である。ダウンタウンに大型店はおろかショッピング街すら今やない(六二七頁)。黒人の若者における死因の第一位は殺人で、自殺が第三位である(六三三〜六三四頁)。憲法という法律上の観点から、もう改善の余地はないという限界にきたかのようである。その法的措置によって確かに一部の黒人は社会的上昇への機会を獲得できたかもしれない。だが、一部の黒人学者が言うようなカナダやスペインと比較して合衆国が非人種主義的社会かどうかの議論は、ゲトローに住む黒人大衆にとって無意味だ。彼らが直面する現実はそのような黒人学者の「アメリカ」には含まれない(六三五〜六三七頁)。「アフロセントリズム」の主張のように、黒人が自己愛を再生することの必要性が叫ばれている。しかしそのためには自らの過去をきちんと把握しなければならない。アフリカの礼賛によってアメリカ黒人としての過去、すなわち「耐え忍び、抵抗し、打ち勝ち、創造し、そして何よりも自由になるた

めに闘うことについての彼らの叙事詩」の価値が減じられてはならない（六四二～六四六頁）。

第V部では各地のブラック・ディアスポラによる音楽、造形芸術、文学、スポーツ、宗教上の達成点が確認される。とくに宗教にかかわる憂慮すべきアメリカ黒人社会内部の分断的現状に注目したい。まず、従来の一般的印象と違って、キング牧師は黒人聖職者の多くから大した支援をえられたわけではない。ジエームズ・コーンのような一部の戦闘的キリスト者を除けば、黒人教会は社会的に拒絶されたゲトローに密着した信仰の探求に無関心である。アメリカ黒人が好んで使う五世紀にわたる特異な経験から得られたアイデンティティとしての「魂」は、根底に流れる救済力なくしては成り立ちえないはずだ（七八三～七八六頁）。

もとよりブラック・ディアスポラのすべてが同じ方向を向いてきたわけではない。自らの自由にあえて献身できなかった者、自分の境遇に甘んじている者、他人の自由に関心な者、カリブ海域には植民地支配の支援者たちもいた。「現在では、自分たちの思い描く自由からことごとく締め出されたために、ほかの黒人を搾取と絶望の生活に押し込めることになる」とも、自分が社会的優先権を獲得することに必死な人びともいる。（七八六～七八七頁）。確かにブラック・ディアスポラは自らを解放しなくてはならないが、同

時に「国家や国民の名、人種の名、そしてさまざまな神の名の下に自由を否定しようとするあらゆる人びとに対して、自分たちの自由についてばかりではなく自由そのものの大義を弁護することができるのである。」（七八七頁）。

本書でとりわけ心を打たれたのは、深刻な分裂や裏切りをふくむ、従来語のささ敬遠されがちだった歴史的差別の犠牲者自身にも内在してきた問題と向き合う著者の姿勢である。それは彼らの問題を我らの問題として受け止める感受性に裏打ちされている。日本に居住する私たちも、他者としての関わり方はいえなない。それは、たとえば日本企業もデトロイト都心部の貧困と差別の深刻化に手を貸してきた（四六四頁）からだけではない。ますますグローバル化が進む現在、あるべき社会像とともに描く責任という意味でも、本書が提示した「近代」に決着をつけるという責務を誰も免れはしない、と読者は知るだろう。

（ロナルド・シーガル著、富田虎男監訳『ブラック・ディアスポラ——世界の黒人がつくる歴史・社会・文化』明石書店、一九九九年、本体価格六八〇〇円）

（南山大学外国語学部助教授）